

佳作

優しさにふれて

滋賀県 大津市立皇子山中学校三年 門田 梨沙

私が中学二年の頃だった。私の中学では選択授業が何時間もあり、私はその内の一つで理科を選択していた。週一で行われるその授業では毎回何かしら作っていた。スライム、葉脈のしおり作り、空高く飛ぶフィルムケースを作ったりした。物作りが好きな私にとっては、それが楽しみでたまらなかつた。

そして最後の課題として作ったのが「電池で動くおもちゃ」だ。おもちゃといつても、はんだごてを使ったりもするし、結構本格的なものだった。パンフレットから好きなものをつ一つ選ぶのだが、値段の差にびっくりした。安いものなら九百円から千円ほど、高くなると一万円まであった。私は思った。値段が上がるにつれてより複雑で面白いものが作れる。そんな私が作りたいと思ったのは三千円程度のオルゴールのようなものだった。けれど親に悪いと思い、その日の内には決められなかつた。

家に帰り、母に選択授業のことを話した。三千円のものを作りたいとは言わず、いくらまでなら作ってもいいか質問した。

「いくらでもええよ。」
予想していたものと全く別の返事が返ってきて、私はとても驚いた。学校の授業でつくるためだけに、そんなにお金を出してくれるとは思っていなかったからだ。私は慌てて、高ければ一万円以上のものもある、と説明した。

「梨沙が作りたいもの作ったらええよ。」
信じられなかつた。てつきり私は、ここまでの金額なら、という答えが返ってくると思った。「どうして?どうして?」と私は何度も聞き返していた。いつの間にか私は泣きそうになっていた。「作りたくないもの作っても、面白くないやろ。」

だから梨沙の好きにすればええよ。」
それはもつともな事だったけど、私には信じられなかつた。私がいち万円のものを作りたいと言ったら出してくれる。そんな母の思いにとても感動したのだ。

他の人から見れば、たかが三千円や一万円のことと思ったり、お金関係で感動しても…と思うかもしれない。私はそうではなくて、私の事を思ってくれる、これほど優しい母に思ってもらえる。それがとても嬉しかったのだ。喧嘩も沢山してきて、私は嫌われてるんじゃないかと心配していた。だからこそ、泣きそうになるほど嬉しかった。

これ以来、今まで以上に母の事が好きになれたと思う。私も人の事を考える、母のような人になりたいと思つた。

